

# 毛沢東論序説

——その人間と思想の形成——

全 先 喬

## 目 次

1. はしがき
  - a. 毛沢東の死〈棺を蓋いて定まる〉
  - b. 孤独な修道僧
2. 毛沢東思想について
  - a. 農民革命論
  - b. 実践論と矛盾論  
(以上本論叢に掲載)
  - c. イデオロギーとしての毛沢東思想
3. 中国文化大革命について
  - a. 文化革命発動とその経緯
  - b. 真実と虚構と
  - c. 文化大革命の評価
4. むすび
  - a. 毛沢東の後に来るもの
  - b. 中国近代化の問題点  
(以上)

## 1. は し が き

### a. 毛沢東の死〈棺を蓋いて定まる〉

中国一代の風流人物<sup>(1)</sup>戦略家にして政治家、詩人にして哲学者、革命的ロマンチストにしてオプチミスト、毛沢東が、その波瀾に満ちた人生を終えて、永い眠りについたのは、今からちょうど2年前の1976年9月9日の重陽節の日であった。

《重陽節とは、中国の菊の節句で、陽数の九の字を二つ重ねているので、そのように呼ばれている。この日人々は、家を出て山野に到り、菊酒を汲み用意の弁当を開いて清遊する習慣がある、もちろん陰曆である。》

その死は、すでに広く知られているとおり、国外、国内に大いなる影響を与えた。とくに国内においては、後継者をめぐって権力闘争（華国鋒か！ 江青派か！）がおこり、それは恰かも、歴代王朝の政権交替期における、派閥対立と紛争に類似していた。

結果的には、公安軍（華国鋒支持）の出動により、毛沢東側近の江青夫人、王洪文、張春橋、姚文元のいわゆる四人組<sup>(2)</sup>が逮捕されて、混乱は一応收拾されたが、それは今日まで、なお尾を引いており、地方によっては不安定な政局がつづいている。

中国の古語に“棺を蓋（おお）いて定まる”〈晋書劉毅伝〉とあるが、その意味するところは、人が死んでこの世を去った後に、はじめてその人の生前の事業と行為の真価が定まるといっているのである。

生前の毛沢東は、中国においてはカリスマ的な存在であり、彼への批判はタブーであった。それだけに、その死を契機として無謬とされていた彼に対して、再評価の動きが出始めていることは注目されてよい。

毛沢東の死後、その後をついだ華国鋒新体制（1976年10月22日）が確立してから、これまた2年の年月が流れている。

華国鋒政府が、先づ最初にやったことは、毛沢東の記念館の建設と、毛沢東記念論文の刊行《毛沢東選集第5巻の出版、1977年3月1日》であった。それは表面的には毛沢東路線の正統性の継承をうたい、引続き革命を継結するといっているが、実際には中国近代化政策と関連して、思想第一から実務重視に移り、プロレタリア文化大革命も第1段階を終えたとして、革命の続行を一時たなあげにしている。このように見てくると、現段階の中国では、毛沢東の死を契機として大きな変化が起こり、それは勢いのおもむくところ、非毛沢東化の道に通ずるもの

## 毛沢東論序説

と考えられ、また、毛沢東思想そのものについての再評価へと進むものと思われる。

このような時点において、カリスマ的存在であった毛沢東を、その高台から地面におろして、その人物、思想、とくにその政治理念、経済政策について再検討してみることは、今後の中国の国づくりとその進路とに関連して、是非必要なことと考えられる。よって、私は私なりに、毛沢東の人物論を展開して、その真実と虚構について、アプローチを試みたい。

### 注

- (1) 風流人物とは、思想、感情が豊かで、新しい社会を創くる、すぐれた人物の意味。毛沢東は、その詞“沁園春・雪”(1937年2月作)の最後の句に“数風流人物、選看今朝”(ほんとうにすぐれた人物は、現在の中国政府の中に見られる)とうたっており、当時の彼の自負心のほどからかかわられる。
- (2) 四人組、中国語では四人幫と書く、“幫”とは“組”とちがいで、広範な面にわたる組織網のこと。英語では、Gang of four といっている。Gang とは面白い表現である。

### b. 孤独な修道僧 Lone monk with leaky umbrella

饒舌家の毛沢東は、ある時、ある場所で、いろいろな談話や、感想を述べているが、それらの話の中に、彼独特な人生観、社会観、世界観、そして彼自身の孤独感がうかがわれるのは興味深い。

その一つの例として、1970年12月、北京における毛沢東とエドガ・スノー<sup>(3)</sup>との対話の折の発言である。

“自分は、複雑な人間ではなく、実は極めて単純なのだ。いわば、破れ傘を手にして、世界を歩く孤独な修道僧にすぎない”

この言葉は、スノーの筆によって、ただちに世界中に伝えられ、その意味するところの内容やニュアンスについては、各国において色々な解釈がなされたことは、広く知られているところである。

私の知己の中国知識人の解釈によると、中国のしゃれ言葉＝歇後語 くちえ・ほ

一・い><sup>(4)</sup>に、和尚打傘・無髮無天＝坊主が傘をさせば、髮（頭のかみ）もないし、天（空）もない、というのがある。この言葉の中の、髮は中国語発音、ふあであり、それは、法（同音、ふあ）に通ずる。従って無法無天ということは、法律もなければ、秩序もない、即ち革命こそ、すべてであるという意味にとれるとの説明であった。毛沢東がよく口にする、造返有理、革命無罪は正にそれであり、旧秩序を打破して新秩序をくりかえし創出する、革命家の道を示したものである。しかし、破れ傘を手にして歩く孤独な修道僧とは、一体どういう意味なのか！破れ傘をさしてあるけば、雨はもれて躰はぬれるかもしれないが、見透しはさくわけである。前進は可能であり、また展望もある、ということであろう。

飛躍した解釈になるが、マルクス主義によるヨーロッパの革命（ソビエト・ロシアをはじめとする）は、実際には正統なものではなく、非正統的といわれる中国革命の内にこそ、マルクス主義の真髓が活かされており、従って、中国革命は現在世界で孤立しているかに見えるが、長期的展望においては正当性をもつようになるという、毛沢東の自負と自信を言ったものではなかったのか！即ち毛沢東がエドガスノーノーに会って“私は無法無天である”と云った時〈法〉とは、ロシア的およびヨーロッパ的マルクス主義を指さして、これを批判したものではなかったのか！

毛沢東は、その民族的特質、および革命理論の独自性を保持しつつ、中華人民共和国成立（1949年）の後、新民主主義革命から、社会主義革命へ歩を進め、いま、ソビエトの社会主義を、修正主義、社会帝国主義と非難しており、また、ヨーロッパの近代に挑戦して、中国のさがしあてた革命方式こそ、人類の未だ経験していない、共産主義革命を実現しうる、唯一の方法だと確信しつつ、壮大な夢の、一大ロマンの実現に立向っているといつてよいのではあるまいか！

毛沢東思想の特徴は、人々が、人間の多面的、創造的能力を平等主義の上に発現させることを目標に、利潤動機、物質的刺激によらず。また狭い効率性基準を尺度とせず、人々の積極的参加、エリートに指導されない大衆運動によって、

## 毛沢東論序説

経済社会をつくりあげていく新しい価値体系の設定である。

マルクス主義との関連でいえば、「正統派」、マルクス主義でいう、生産力→生産関係、土台→上部構造という因果関係を、ある意味では逆転させて、人間の思想変革、大衆運動をつうじての生産力の解放を目ざしたものといえよう。

重ねて言えば、毛沢東思想は、ソビエト・ロシアのマルクス・レーニン主義に対する訣別と、ヨーロッパ共産主義に対する失望から生れた、ヨーロッパ近代への批判と挑戦と見るのは、当を失しているであろうか。

### 注

- (3) 毛沢東とエドガ、スノー会談の1970年12月という時点は、1966年の文化大革命の発動、紅衛兵による政治権力の批判と破壊、毛沢東はこの運動を通じて、北京を占拠していた劉少奇ら実権派グループを打倒して、その指導権を取り戻した。文化大革命は林彪（解放軍）の力を借りて二者合作で行われたが、その後国家主席の地位を要求する林彪と毛沢東の間に対立が起こっており、毛沢東の心中には不安の影が濃くしていた時期である。

エドガ・スノー Edgar Snow (1950~1974) : アメリカの著名なジャーナリスト、1905年生、イギリス系、コロンビア大学に学ぶ。1936年世界ではじめて中共政治地区に入り、そのレポート“中国の赤い星” Red Star over China を1937年に出版して注目をおびた。それより、しばしば中国を訪問し、毛沢東、周恩来らのために国際的スポークスマンの役割を果たした。1974年死去、その墳墓は中華人民共和国の厚意により、北京郊外に安置されている。

- (4) 歇後語（ちゑ・ほー・い） 中国のしやれ言葉、かくし言葉の意。例えば“日落香残，燒去風心一点”は、香の字の日がなくなって、禾となる。風を中心点がなくなって、几となる。両字を合せると、禿（はげる）の字ができる。  
一説によると、和尚打傘の前句は、無髮（法）無天の後句を引出すためのもので特別の意味はないとのことである。そうなると私の解釈は、ややひねりすぎた感じがしないでもない。

## 2. 毛沢東思想について

“毛沢東思想”とは、いつの頃から言はれるようになったのかということ。それは、1945年、中国共産党第7回全国大会における、当時の劉少奇党副主席の提案

## 毛沢東論序説

にはじまる。

その折、中国共産党の規約の総綱において、

“中国共産党は、マルクス・レーニン主義の理論と中国革命の実践と統一の思想である、毛沢東思想をもって、すべて行為の指針とし、いかなる教条主義、経験主義にも反対する”

という規定が採択された。この規約が公認されてから以後、いわゆる毛沢東思想が流布され宣揚され、とくに1966年—70年のプロレタリア文化大革命の時期には、物神化（絶対化）され個人の病気は勿論のこと、あらゆる問題解決の聖典とされるに至ったのである。

中国では、一般に毛沢東思想というが、毛沢東主義とはいわれていない。その理由はいろいろあるであろうが、個人の名前の末尾に主義という言葉をつけ加えられるのは、マルクスにおけるマルクス主義、レーニンにおけるレーニン主義のように、本源的な体系的な教義にのみ許されるのであって、その点毛沢東思想のように、解釈のしかたによっては、いかようにも活用できる幅の広い教義とは、理論構築とその展開において格差のあることが理解されているためではなかろうか！

毛沢東思想の解釈に融通性のあることは事実であり、それは、中国の伝統思想（その政治哲学老子、孟子、朱子など）の中に見られる二元論の影響をうけているものといえよう。

アメリカの中国研究者（ハーバート大学を中心とした）の中には、毛沢東主義と呼んでいる者がおり、ソ連研究で有名なJ・ドイッチャヤ(Issac Deutscher)にも“毛沢東主義”の著書がある。また、フランスにおいても、毛沢東主義、毛沢東主義者と呼ばれるものがある。

フランスにおいては、1968年の五月革命、学生を中心とする左翼の反体制運動昂揚の時期において、毛沢東の文化大革命に引きつけられた人々には、自らマオイストと呼び、毛沢東主義により大衆のなかにひそんでいる、能動的精神の発揚こ

## 毛沢東論序説

そ、古い殻をかぶって老化した、伝統的左翼のイモビリズムをうちやぶる、新しい変革運動のテコとして認識された。また、この時期においては、フランスの著名な哲学者 J.P. サルトルも、毛沢東の革命路線を高く評価して、管理化資本主義時代における階級闘争の新しい形態にかなった革命方式であるとした。

しかし、後になって、紅衛兵運動も、造反有理も、上海コンミュンも能動主義も、本質的には政治権力による大衆操作であったと理解され、“演出された壮大なドラマにあざむかれた”という見解が広まってゆき、マオイスと、毛沢東主義は、今日では無関心の対象となっているようである。

毛沢東死後における、最近の“毛沢東思想”の定義について見ると、“毛沢東同志は、現代のもっとも偉大なマルクス・レーニン主義者である。毛沢東思想は、わが軍、わが党、わが国人民が団結して闘い、引きつづき革命を行う上での勝利の旗印であり、国際プロレタリア階級と各国革命人民の共同の財産である。毛沢東同志の思想と学説は永久不滅である。毛沢東同志が理論面でなしたげた、最も偉大な貢献は、国際、国内両面におけるプロレタリア階級独裁の歴史的経験を系統的に総括し、対立面の統一という、唯物弁証法の基本的観点を運用して、社会主義社会の矛盾、階級闘争を分析し、そうすることによって、社会主義社会の発展を明かにし、プロレタリア階級独裁の下における継続革命という、偉大な理論をつくりあげたことである”（1977年3月1日、毛沢東全集第5巻の序文）と指摘している。

ここで注意すべき点は、毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義そのものであるというのではなく、それを中国革命の実践を通過して発展させ、それが今や世界革命の最高理論となっているというのである。そこで、ひきつづいて、毛沢東思想の特徴について考察してみよう。

### a. 農民革命論

毛沢東が農民革命を重視したのは、毛沢東が農民（中農）の子として生れ、他

## 毛沢東論序説

の中国共産党の指導者、例えば、劉少奇、周恩来ら（前者はソ連留学、後者はフランス留学生で、ともに都会的に洗練された知識人であった）の比較して、土着性の強い性格と、その生い立ちと教育環境の影響が大きかったことによるものであり、眼前にみる重大な農民問題の解決なしには、中国革命は前進できないという、現実と直面していたためであろう。

毛沢東の農民革命論は、もちろん、マルクス主義理論の影響を受けており、ブルジョア民主主義革命の基礎を、農民問題にみたレーニンの労農同盟論や、また民族問題は実質的には農民問題であるとした、スターリンの植民地解放理論をも学びとることによって、展開されたものであろう。しかし、毛沢東の農民革命論は、彼が遅れた中国農村の中に、農民とともに革命をおしすすめ、その実際の体験を通じて、中国農民が過去に輝かしい革命の伝統をもち、巨大な革命エネルギーをもつものと確信したところにある。

従って、毛沢東の農民革命論は、マルクス主義を普遍的な真理としながらも、中国農民戦争の伝統をふまえた、色濃い民族的的特質が貫通しており、マルクス主義的農民革命論として、独自の展開と発展がそこみられるのである。

毛沢東の農民革命論<sup>(1)</sup>の特質として指摘されるところのものは、彼が人民大衆に無限の信頼をよせ、人民の力こそ、歴史を動かす唯一の力であるとする、強い確心をもったことである。それは、毛沢東が井岡山時代（1927年）、抗日戦争時代（1937年）、第二次世界大戦後（1945年）の時代を通じて、常に軍事力や経済力の物質的条件において、圧倒的に優勢な敵軍との戦闘を通じて知った、頼るべきものは大衆の支持と、人民の中に潜在するエネルギー以外にはないという、認識によるものである。

事実、毛沢東に指導された装備の貧弱な赤軍は、人民の力を動員し、人民の力に依拠することによって、幾多の戦闘に勝ち抜いてきた。そこには、戦争の最後を決めるものは、歴史を最終的に決定するものは、軍事力や経済力ではなく、“人力”と“人心”にあるのだとする、持久戦論<sup>(2)</sup>の中に、毛沢東の戦争観、歴



## 毛沢東論序説

史観が生れたし、また、客観的条件のゆるす範囲内における、“自覚的能動性”あるいは“主観的能動性”<sup>(3)</sup> いかんによって革命の成否は決定されるとする。毛沢東の能動的革命論の哲学が生れたのであった。

このような、毛沢東の見解は、遅れて世界史に登場した半植民地、半封建の中国社会では、革命が先づ何よりも精神の変革、革命母体の確立を必要とし、人力と人心の全面的な発揚なくしては、革命は成功させることはできないという、現実の要請が存在したことを物語っている。

後に、1960年代の社会主義革命の段階において、思想、文化、風俗、習慣、それに“魂”の全面的改革を旨とする“文化大革命” The Cultural Revolution (1966年～69年) が発動されて、これこそ、社会主義革命の成否を決定する、基本問題であると喧伝されたのも、同じ発想によるものであることは、言うまでもあるまい。

### 注

- (1) 毛沢東は、その述懐の中で“私は、国立図書館の助理員時代に、李大釗のもとに急速にマルクス主義の方向に成長し、陳独秀もまた私の関心を同じ方向にむけるのに、あづかって力がありました”(前掲書、エドガ・スノー著“中国の赤い星”)といているが、陳独秀、李大釗はともに当時の北京大学の教授であり、後に中国共産党の創設者となった。

李大釗(1889年～1927年)は、辛亥革命(1911年)から、五四運動(1919年)、さらに中国共産党創立(1921年)に至る、現代中国の変革期における卓絶した理論家であり、マルクス主義の受容において、毛沢東に大きな影響を与えた人物である。

李大釗は、中国革命の特質を“わが中国は一つの農業国家であり、大多数の労働階級とは、まさに、あれら農民である。彼らがもし解放されなければ、われわれ国民全体が解放されないのだ。彼らの苦痛こそ、われわれ国民全体の苦痛であり、彼らの暗愚こそ、われわれ全体国民の暗愚なのだ、すなわち、彼らの利害こそが、われわれ国民の全体の利害なのである”と言い、“中国の歴史のなかで、歴史を創る者として、農民が中国革命の新たな地平をきりひらく主体として出現するであろう”ことを予言したのである。彼のこの農民革命論が毛沢東に継承され、それが更に実践を通して発展したということができよう。

- (2) 持久戦論とは1937年5月、に延安において、毛沢東が抗日戦争について講演した、

## 毛沢東論序説

人民戦争論の一部である。

- (3) 自覚的能動性＝主観的能動性について、毛沢東は次のように解説している。“自覚的能動性は、人間の特色である。人間は戦争において強烈なこのような特色を現わす。戦争の勝敗はもとより、双方の軍事、政治、経済、地理、戦争の性格、国際関係の諸条件によって決定される。

しかし、それだけで決定されるのではない。それらだけでは、勝敗の可能性が生じただけで、それ自身は勝敗を分たない。勝敗を分つためには主観的努力を加えなければならない、これが戦争を指導し戦争を実行することである。これが戦争における自覚的能動性である”と。〈毛沢東語録・竹内実訳 p.297, 1973年, 角川書店〉

- (4) G. マルチネ Gilles Martinet は、その著書“五つの共産主義” Les cinq communismes, Editions du Seuil, Paris, 1971 において「1925年、中国には4億の民がいて、このうち労働者（炭鉱、鉄道、繊維など）は200万であった……従ってプロレタリアートの指導的役割ということばは、文章上のスタイルか、あるいわ、あえて言えばイデオロギー的性格をもった、予言以上のものではなかった」と解明している。

毛沢東におけるプロレタリアートの概念は、上述の李大釗のいう、多数の労働階級とは、まさにそれら農民であるという言葉と一致しており、マルチネの指適するとおりである。

### b. 実践論と矛盾論

毛沢東思想の全体を総括する、哲学上の基礎を明らかにしたものは“実践論”（1937年7月）と“矛盾論”（1938年8月）である。

実践論は、“知”と“行”つまり理論と実践について、また矛盾論は、矛盾一つまり対立物の統一について、ともに、中国共産党内左右の主観主義、すなわち、右翼日和見主義者の経験主義と左翼冒険主義者の教条主義の誤りを、批判することに主たる目的をおき、毛沢東の認識論、あるいは唯物弁証法哲学を展開したものである。

毛沢東は、実践論において、人間の認識は、社会的実践（生産活動、階級闘争、科学実験など）の過程で行われ、まず感性の段階にはじまり、理性の段階に高まるものとする。

感性による認識は、事物に対する単なる感覚的印象で、一面的現象的であるが、

感覚から思惟に進む理性的認識は、事物の内部矛盾と法則性、すなわち、事物の内的関連を捉えることができるのである。

ところが、一つの理性的認識が得られたとしても、理性的認識はそれで完結するものではない。理性的認識たる理論は、また、その理論をいかに実践するかという場、たとえば、文化革命などの場において、その理論が事物の動きに妥当するか否かを検証し、実践を通して理論の不適合性を修正していかねばならない。ここにおいて、理論と実践は、無限の展開であり、循環往復して無窮に至り、その内容は、一循環することにより高い段階に至るのである。

理論、理性にのみ固執する者は教条主義に陥り実践、感性にのみ固執する者は経験主義に陥るので、理論と実践、感性的認識と理性的認識の交互滲透が必要であるというのである。（傍点は筆者）

このような、毛沢東の理論展開は（知と行に関して）は、明の王陽明学より、宋の朱子学に近く<sup>(1)</sup>、その哲学的表現は“易学”的であるように思われる<sup>(2)</sup>。

つぎに、矛盾論においては、矛盾はすべての事物の発展過程に存在し、また、どの事物の発展過程にも矛盾運動が、始めから終わりまで存在するといひ、これを矛盾の普遍性とする。矛盾の普遍性は、矛盾の特殊性の中に育っているから、矛盾の特殊性の研究が必要であるとし、矛盾する事物、および事物がどの側面にも、それぞれにある特質を求め、これを矛盾の特殊性とする。

このように、普遍—特殊の論は、感念、唯物のいずれを問わず、弁証法のもつ特色である。従って、われわれは、一事物の矛盾の特質と、一事物の矛盾のもつ主要側面と次要側面を見究めるべきである。そして、また、一事物の矛盾のもつ主要側面と次要側面は、事物の運動発展の中で相互に転換することに注意しなければならない。

例えば、一般に、生産力と生産関係の矛盾においては、生産力が主要とされているが、一定の条件の下では、主要な決定作用を表わすものが逆転することがあり、生産関係を変更しなければ、生産力が上昇しない場合もあるので、この場合

は生産関係の解決が主要となるのである（傍点筆者）。

毛沢東の弁証法を、中国の伝統哲学の中に求むれば、それは宋学の“理一分殊”の論と相似している。毛沢東においては、調和と秩序を示す〈理〉という表現を、相反と闘争をしめす〈矛盾〉という表現にとりかえたのであり、よって矛盾は一であって分殊であると解釈すればよいであろう。また〈事物〉という表現も、一物から国際関係にいたるまで、非常に幅が広く用いられており、朱子の格物説の〈事物〉を思わせるものがある。

要するに、毛沢東の思想は、理論と実践の交互滲透にしても、矛盾の特殊性の究明にしても、すべて彼の経験と実践（農民革命の）に裏打されていると見てよいであろう。

毛沢東思想とマルクス主義を画する問題点は、マルクスが“物質的生産関係”を社会の土台をなす下部構造とし、それが上部構造であるところの社会的、文化的、政治的存在意識を規定するとしているが、いうまでもなく、これが、唯物史観の骨格であり、マルクス主義の原理である。

ところが、毛沢東は、その矛盾論の中で、“物質的なものが精神的なものを規定し、社会的存在が社会意識を規定することを認めるが、同時にまた、精神的なものとの反作用、社会的存在に対する社会意識の反作用、経済土台に対する上台に対する上部構造の反作用”（上述の筆者傍点の個所、生産力と生産関係のところを参照）を認めて、逆方向の上部構造の重視を行っているが、この重視の程度いかんによっては、唯物弁証法の根底をゆさぶるようになるかもしれないのである。

毛沢東は、現実において“武器より人の要素を第一”とする、精神主義を示しており、思想工作を人民解放の優先条件にしている。そこには、国家社会のために、人民のために、自己犠牲になることを少しも恐れず、勇敢に実践する人間をつくるという、強烈な意識革命が意図されている。

マルクス・レーニン主義の図式によれば、資本主義という環境を変革して、社会主義社会に移行すれば、それに伴って理想主義的人間が誕生するというので

ある。これに対して、毛沢東思想においては、先づ人間の意識革命を先行させ、その理想的人間の集団の力によって、社会主義社会を実現しようとする図式である。

毛沢東自身は、こうした、精神優先、つまり精神が物質的条件に反作用する一面を大事にする考え方は、唯物論に違反するものではなく、むしろ弁証法的唯物論を堅持発展させるものとしているのである。しかし、“経済学批判”の理論に忠実であろうとする人々にとっては、毛沢東の考え方は、明らかにマルクスの基本構想から、逸脱しており、それは反マルクス主義への道へと進むものとされているのである。

マルクス主義に対する、イデオロギー的解釈と、それと関連した。社会主義経済建設の路線の相違が、中ソ対立の根源となっていることは、いうまでもない、と同時に、ヨーロッパのマルクス主義者たちからの批判も、また、それによるのである。

#### 注

(1) 南宋の朱子(1130~1200)が、周濂溪の宇宙論、張横渠の気の実在論、程明道の生の哲学、程伊川の理性の哲学を主軸にして集大成した、新しい儒学であり、宋学とも呼ばれる。その特徴とするところは、人間の修養の為学において、心情未発動の場合は、本性を存養し、身の振舞いを厳粛にする〈居敬〉。そして、心情発動の場合は、その発動が性の筋目に合うが否かを察識し、また文字講論の場合に、物事の道理を窮めるのが、〈窮理〉(きゅうり)。この二つを併用して人間の自由の境位を得るものとしたのである。

朱子学は、人間と自然を大極の理において統一し、体系的で合理的である。ことにその“窮理説”は学問的で、当時の社会の矛盾を指摘し、社会改革への方向をしめしている。

(2) 易は、積極的、動的素因である“陽”と、消極的、静的素因である“陰”という、性質の相反する一気の、両側面の消長往来、交錯変化で世界のもろもろの現象が生ずるという、動的 세계観をもっている。易は、矛盾運動を事物発展の原理とするから、事物の相反する両側面の対立、相剋、あるいは闘争を説くが、それは闘争主義ではなく、循環論、調和論が、その背景となっている。

## 毛沢東論序説

毛沢東の場合は、闘争をもって矛盾の解決、事物発展の根本とし、それを絶対的、普遍的、永続的なものとした。したがって、矛盾の解決、事物の発展は、矛盾する二つの側面のいずれが一方の消滅によってなされるが、それと同時に、異質の新しい矛盾が発生し、方法は異なっているが、それも同じく闘争によって解決され、事物はそれによって一層の進展を見るところなのである。

そこで、両者にみられる差異は、毛沢東にあっては、不断の革命闘争、すなわち連続革命が事物発展に不可欠のものと考えられ、易においては、革命は、いわば陰陽循環の一過程にすぎず、従って革命闘争が絶対的であるとわ考えないが、革命そのものは、天の時を得て、天命にしたがい、人心に応じて行い。人論的、道徳的立場から、これを完遂させねばならないとするのである。

(1978年9月9日執筆、以下次号)

### <参考文献>

1. China's Economy and Maoist Strategy, by John, G. Gurley, 1976.  
“中国経済と毛沢東戦略” J. ガーリー著 中兼、矢吹訳。岩波選書、1978年。
2. The Chinese Road to Socialism: Economics of the Cultural Revolution, by E. L. Wheel Wright & Burce McFarlane, 1970.  
“中国経済の解剖” E.L. ウィールライト B. マクフアレン著 山田訳、サイマル出版社1973年。
3. Les Cinq Communismes, by Gilles Martinet. Editions du Seuil, 1971.  
“五つの共産主義” マルチネ著、熊田訳 岩波新書、1972年。
4. 梅本克己著 “唯物史観と現代” 岩波新書、1974年。
5. 三浦つとむ著 “毛沢東主義” 勁草書房、1976年。
6. 竹内 実訳 “毛沢東語録” 角川文庫、1971年。
7. 北京・外文出版社 “毛沢東選集” 第五卷、1977年。
8. 中国文化叢書、赤塚、金谷編 “思想史” 大修館書店、1973年。